研究、論説、詩歌、随筆の小誌（未発表のもの）
『羔』（No. 4）
――1933年2月――

1933年2月
小池辰雄

（内容）

「基督者とは」
詩篇（4）（自由訳）
　第16篇
　第17篇
「星のたより」（4）〔訳詩〕
　「五月の花」（ザ・メイフラワース）　ホイッチャー
「樅の日記」（4）　小池政美
　1918年12月11日（水）　12月12日（木）
「雁が音」〔短詩〕（2）
　「井ノ頭の夕」
　「大学よ！」
　「凱旋」
編輯後記

＊

第30回　誕辰の日に。（2月7日）

1 ああエホバよ、わが魂は汝を仰ぎのぞむ。
2 わが神よわれ汝に依頼(よりたの)めり、願わくは愧(はじ)を負わしめ給う勿れ。
7 わが壮(わか)きときの罪とわが愆(とが)とはおもいいで給う勿れ、
　エホバよ汝の恵みの故に汝の仁慈(いつくしみ)に循(したが)いて我を想い起こし給え。
8 エホバは恵み深く直く在(ま)ませり、斯るがゆえに道を罪びとに教え、
9 謙遜者(へりくだるもの)を正義(ただしき)に導き、その道を謙遜者に示し給わん。
15 我が眼はつねにエホバに向かう、
　エホバわが足を網(あみ)より取出し給うべければなり。
22 神よ凡(すべ)ての憂いよりイスラエルを贖(あがな)い出だし給え。

――詩篇第25篇より――

「基督者とは」

――聖句の引用をなす遑なかりしを謝す――

彼は自己に対して興味を有たぬ者である。世の人が問題とするように自己を育てることには、匙を投げてしまったのである。彼は道をどういうように経て来たにしろ、或る時自分の全身を取り巻く重き鎖に気がつき、自分の全心を蝕んでいる蟲の悩みを知るに至り、一歩も動けなくなったのみか、本当にうち倒れたことを経験したものである。

神が人を自由なる意志の存在者として、全く人格的に遇し給うて、かの聖なる律法をモーセを通して人類に授け給うたことは、却って人類を死に導くものとなった。人を永遠に生かさんとした律法は却って人を殺す結果に導いてしまった。それより先に、律法を知らざりし人が、神の命に背いて神の怒りを招いてしまった。人が律法を履行し得ないのは、人の心が聖なる律法の前に既に穢れているからである。それでは神はそんな無力の人間に何故無理な律法を授け給うたか。人間をして律法の要求の絶対なることを即ち神の古き義の如何に高きものなるかを知らしむると同時に人間の罪がどんなものであるかを克く知らしめんとの聖旨によるのである。アダムとエバの不従順によって既に自由なる意志の全き自由を失って罪の縄に縛られている人間に、聖なる律法を降し給うて、どこまでも人間を人格的にとり扱い給うところに神の神らしさ、人の感謝と畏れを以て神を拝すべき節がある。

斯かる聖にして絶対的の霊なる律法の前に兜を脱ぎ、自ら進んで未練なく、雄々しく、しかし最も謙遜に武装を残りなく解除してしまった者は、唯一つの救の道を神に示されたのである。神に対しては不虔、人に対しては不義なる彼は遁るべき唯一の場所を基督に於て見出したのである。あの十字架に於て旧き自己の総決算を見、キリストの義の新しき我を享け、彼に感謝の外何があろうか。基督教とは基督の教ではなくして、基督のこの十字架の恩恵のことを謂うのである。この恩恵を享けた者を基督者と云うのであって、教会に出入りする人間や、讃美歌を口にする男女や、品行の基督の教に近い者を基督者と称するのではない。神の怒りがその愛の前に万人に向かって発せられしことを基督者は忘れたか。

「我がなす能わざる
　人の我を認めざる
　是れ我が神に対して価値ある所以」（秋本秀男氏訳）

"All I could never be
　All, men ignored in me,
　This, I was worth to God, whose wheel the pitcher shaped."（R. Browning : Rabbi Ben Ezra）

と人間ブラウニングの告白したように、恩恵の絶対的なる所以を知った者を基督者とはい

うのである。

地獄は却って天国への門となり、罪は却って義を見出す道となり、荏弱（じんじゃく）は却って神の金剛力を享ける器となり、死は却って生への正道なるを知ったのである。

名誉も財宝も知識も権勢も健康も、およそこの世の人の高く評価するところのものは基督者にとって関心と興味の目的となることは出来ないのである。基督者ほどしょうがない者はない。

然らば基督者は何をも求むるなき人間らしからぬ者であるか。決して然らずである。彼の魂は太陽を目指して舞いあがる鷲の如く、真理を求め、義を慕うものである。彼が苟（いや）しくも聖霊に導かれてあるときには、およそ陽（ひ）の下に見得るところの最も美しき愛に生き得るのである。基督者にとっては神とは実感され得る確かなものであり、キリストは彼のすべてであり、唯一つの目的である。信仰にありて而もなお此の真実感、神とキリストの生ける把握がないならば、これほど虚（むな）しきことはないのである。神とキリストの把握は思索や冥想にあるのでは断じてなく、実際に生きることと生命（いのち）によるのである。それ故に基督者にとっての重大なる二つの問題は、何を目的としているかと云うことと如何に生きているかとである。目的は、対象は、永遠のキリストであり、問題は如何に現在を生きているかである。一日一日である。否、その一瞬一瞬である。いとも小さき現在のこととといとも大なる永遠のこととである。キリストとそのキリストに生きているかと、この二つである。そしてこの生活原理は勿論、二つではあっても一つなのである。曰く、彼、人の子、羔である。キリストへの信頼、之一切である。ルーテルが曰っているように、

「無から有を造り出すのが、神の性質である。それ故、未だ無でない人から神は何ものをも創り出し給わない」

のであって、キリストへの罪のままの自己の投げかけ、信頼をなさぬ者を彼は迎えて下さらないのである。されば基督者とはキリストに対立するものでもなければ、キリストに自ら従ってゆくものでもなく、キリストに呑まれる者であり、キリストを衣（き）る者である。基督者の各自が一つの小基督、否、

「基督者は基督である」

とまで誤解を踏み越えて言い得るのである。然り、基督者は本当にキリストを生くるときに自ら意識せずして基督のいのちそのものになっているのである。

「汝ら父の全き如く全かれ」

とのキリスト・イエスの重き要求は、ただこの時にのみ、斯くしてのみ、キリストにあってのみ、満たされるのである。そのことを最も大胆に信ずべきである。しかし決して自ら考うべきでない。

罪のゆるしを得、一切の問題から信仰によって、恩恵へのアーメンによって、完全に解かれて自由なる基督者にもまして自由なる者が他にあろうとは全く考えられない。勿論、

彼が地に歩んでいる限り、常に世とその慾に対して戦いをつづけて居らねばならぬし、彼の人間性は矛盾の縄を以て自らを帯している。けれども彼は聖旨のならんことを祈りの祈りとして、聖名の栄光を讃美の讃美として生くる人間となったのである。何たる感謝ぞや、神は天より喜び、偉観中の偉観として見給うのであろう。基督者に大小は断じてない。彼らは各々その分を得て神のみ業に参与せしめられる子らである。み名のため、み業のためならば、いかなる苦しみをも地獄をも。深くして限りなき哉！　神の愛！　アーメン、ハレルヤ。

――１９３２年２月26日――

＊

詩篇（４）（自由訳）

Rudolf Kittel : Psalmi

第16篇、第17篇

翻訳の難

荘重にして雄勁（ゆうけい）、ときに哀音を伝え、時に高き調べをうたうヘブライの詩文、簡潔にして力強く、飛躍的にして余韻ある古き民の語句を我らが文字に移す業（わざ）の何と難きことであるか。更にそれが詩文であるために文法的に何（いず）れが主語にして何れが客語なるか区別し難きものも少なからず、時称の上にて「完了」にすべきか「現在」に訳すべきかそれとも「未来」にとるべきかに迷う場合も起こる。なお原文そのものの不備のためにその意の補足に苦しむことがある。ただ希（ねが）う、原文の精神をあやまることなく、その生命（いのち）を殺すことなからんことを。

＊

第16篇

ダビデのミクタム〔書かれたるもの〕

1 **お守り下さい神様、私は依頼（よりたの）むのです（から）貴神（あなた）に。**

2 **汝〔わが魂〕はエホバに言った、「貴神はわが主です、**
貴神を措（お）いては私の善はありません」と。

3 **地に住む聖別（わかた）れた者らには、彼らと秀れたる者に、**

制作・著作： HP「小池辰雄文庫」

ファイル名：PDF 小池羔　作成 2024/09/09　修正 2026/11/04　出力 2026/11/04

それらの者に私の喜びのすべてがあると、〔言った〕。
4 他の偶像に変節する者の悲歎は増すであろう。
私は彼らの（なす）血の酒贄を何で濯ぎ得よう、
また何で彼らの名をわが唇にのぼせ得よう。
5 エホバこそはわが嗣業の分、わが杯の配、
貴神は私の運命を支持し給う方。
6 準縄は私のため楽しき地に隕ちた、
本当に嗣業は善かった私に。
7 私に諭して下さるエホバを讃めまつろう。
また夜な夜なわが腎は私に教える。
8 私はいつもエホバを私の前に在らしめる。
〔彼が〕私の右に在ますが故に、私は〔決して〕動かされぬ。
9 それ故に私の心は喜び、私の栄は躍る、
私の身体も亦安全に在るであろう。
10 それは、貴神は私の魂を陰府に棄て置き給わず、
貴神は貴神の聖き者らを渡して墓を見させはし給わぬからです。
11 貴神は生命の道を私に知らしめ給います。
歓びは溢るるばかり貴神の在まし給うところにあります。
諸々の楽しみは永遠に貴神の右にあります。

2「わが魂は」と暗黙の中に指示しているのではないかと思う。
3第3節は原文が不完全である。

＊

第17篇

ダビデの祈祷。
1 お聴き下さい、義なるエホバよ、私の呼ぶ声に留意して下さい、
私の祈りに耳を傾けて下さい、虚偽の唇に於てではないのです〔から〕。
2 貴神のみ前から私の判決が発せられますように、
貴神の眼が正直なるものを覧給いますように。
3 貴神は私の心を試み、（貴神は）夜には訪い給うた。
貴神は私を糺し給うとも、何を貴神は見出し得ましょう。
〔悪〕念が起こっても、私の口を越えて出ることはないでしょう。

4 人間の行為に於ては、貴神の唇の言によって、
　私は暴行（あらび）の路から〔自分〕を守りました。
5 私の歩みは貴神の轍（わだち）にしっかりと著（つ）き、
　私の踏む足が動かされたことはありません。
6 私は貴神を呼びました、神様、貴神は応え給うからです。
　貴神の耳をお向け下さい私の方へ、お聴き下さい私の言を。
7 貴神の恩恵の奇蹟をお表わし下さい。
　逃げる者を起き向かう者から右の聖手を以て救い給う方（かた）よ！
8 私をお護り下さい、眼の処女（おとめ）なる人の像のように〔瞳のように〕。
　貴神の翼（つばさ）の蔭に貴神は私を蔽（かく）して下さいましょう。
9 私に暴行（あらび）をなすあのような悪しき者の前から、
　私の囲（まわり）をとりかこむ私の魂に対する敵から。
10 彼らは己れの脂肉（あぶらみ）を〔もって自分を〕塞（ふさ）ぎ、
　彼らはその口を〔以て〕誇りやかに言っています。
11 私共が歩むに当たっては、いつも彼らは私共を囲んでいました。
　彼らの眼を〔我等を〕地に打ち伏せんとして彼らは据えています。
12 彼の態（さま）は抓裂（かきさか）んと焦（いらだ）つ獅子のようであり、
　密（ひそ）かなる処に潜（ひそ）みまつ壮獅子（わかじし）のようであります。
13 お起き下さいエホバよ！　彼に立ち向かって、彼を打ち伏せて下さい。
　わが魂を悪しき者から救って下さい、貴神の剣〔を以て〕。
14 エホバ！　死すべき者から貴神の聖手〔によって〕、
　活ける間（ま）にその分を享（う）けた現世（このよ）の死すべき者から。
　貴神は彼らの腹を貴神の宝で満たし給うでしょう、
　彼らは子らに慊（あきた）るでしょう。そして衆（おお）くの子に富（とみ）を遺（のこ）すでしょう。
15 私は義にあって視奉りましょう貴神の聖顔を、
　私は目覚るときに慊（あきた）るでありましょう貴神の聖容（みかたち）に！

1「義なる神」と解す。
8「シオンの女」と云う表現と同種のものと思う。眼の処女即ち瞳に映ずる小さき人（人の像）と云う私的な妙味ある形容である。
10肥満して心の鈍れることを云うものならん。

「星のたより」（4）〔訳詩〕

（其6）「五月の花（ザ・メイフラワース）」　ホィッチャー

残樅訳

〔文庫編集者註：「五月の花（ザ・メイフラワース）」は著作集第8巻『詩歌集』／五、玉髄集（訳詩集）に一部改変されて転載されている〕

＊

（其6）
「五月の花」（ザ・メイフラワース）

（The Mayflowers —— John Greenleaf Whitter 1807～1892）

ジョン・グリーンリーフ・ホィッチャー（アメリカ）

匐い纏うアービュータス、五月の花（メイフラワー）はプリマスの界隈に夥しく生えている。而もこれこそはかの巡礼者（ピルグリムス）をその怖ろしかりし冬の後に歓び迎えた最初の花であった。

〔この詩の題は即ち巡礼者を乗せて大西洋を横ぎりたる帆船メイ・フラワー号と、彼ら清教徒を迎えたる野生の灌木にしておらんだ苺の類なるアービュータス（彼らはこれを船名に因んで同じくメイ・フラワーと呼ぶ）の両者を意味する様に、ザ・メイフラワースと複数形になっている。——訳者注〕

Sad Mayflower! watched by winter stars,
And nursed by winter gales,
With petals of the sleeted spars,
And leaves of frozen sails!

What had she in those dreary hours,
Within her ice-rimmed bay,
In common with the wild-wood flowers,
The first sweet smiles of May?

惨ましき『五月の花』よ！　冬の星に見守られ、
　冬の疾風に育くまれたる。
檣に霙の花散りかかり
　帆布は凍れる木の葉と化れる。

斯かるもの憂き期にして、
　氷結べる入江の中に、
(l)野育ちの五月に笑う初つ花と
　如何なる業をか共にせし。

(l)辛苦の冬を春待った花と共に忍耐をもて過ごしたのである、との詩意と解する。

Yet, 'God be praised!' the Pilgrim said,

而も「栄光は神に在れ！」と巡礼者

Who saw the blossoms peer
Above the brown leaves, dry and dead,
'Behold our Mayflower here!'

'God wills it: here our rest shall be,
Our years of wandering o'er;
For us the Mayflower of the sea
Shall spread her sails no more.'

O sacred flowers of faith and hope,
As sweetly now as then
Ye bloom on many a birchen slope,
In many a pine-dark glen.

Behind the sea-wall's rugged length,
Unchanged, your leaves unfold,
Like love behind the manly strength
Of the brave hearts of old.

So live the fathers in their sons,
Their sturdy faith be ours,
And ours the love that overruns
Its rocky strength with flowers!

The Pilgrim's wild and wintry day
Its shadow round us draws;
The Mayflower of his stormy bay,
Our Freedom's struggling cause.

But warmer suns erelong shall bring
To life the frozen sod;
And through dead leaves of hope shall spring
Afresh the flowers of God!

鳶色の枯死せる葉末を打ち越えて
萌え出づる花を見出でて
「見よ我らが『五月の花』此処に在りー」。

聖旨は曰く「我らの青山此処に在れ、
我らが旅路の幾年も、
我らがために海原の『五月の花』は
再びその帆をうち張る勿れ」と。

お信仰と希望の聖き花、
昔の如く美わしく
許多の樺山の里に咲き
松の小暗き谿村に咲く。

参差の海岸つづく後方に
葉も亦凋まず易りなし、
古への武き英雄の
雄々しかる力に宿る愛の如。

祖先は斯くも後裔に生く。
その確き信は我らの有なり、
その剛き力より溢れし愛は
我らの衷に花咲きにけり。

巡礼の客に暴風吹きにし冬の日に
面影は消えぜし我らの身辺に、
『五月の花』の荒れにし浦にありし日の
患難は我らの自由の源ぞ。

さはれ陽、春を呼びては遠からず
凍れる陸に生命をもたらし、
斯くて希望の失せにし葉より
新たに萌えなん神の花

――1933年2月24日夜八時、日直勤務中、幼年校生徒監室にて、訳之

制作・著作：HP「小池辰雄文庫」　ファイル名：PDF 小池羔　作成 2024/09/09　修正 2026/11/04　出力 2026/11/04

ピルグリムス

「彼等の愛は境遇の然らしめたる所であるか。否、彼等の数奇なる境遇そのものが、愛の産物であったのである。彼等は偏（ひとえ）に父なる神を信じて立った。而して信仰に基づく愛を以て互いに相愛したのである。故にそれは世の常の愛と異なり、静かにして深くあった。清くして熱くあった。」（藤井武全集第5巻309～310頁参照）

メイ・フラワー号の帰還を見送って新大陸の岸辺に立つピルグリム・ファーザースを描けるかの名画（Return of the Mayflower）にも優して来世の希望、自由の世界を予表してくれるものがいくつあろうか。

〔編集者註：「帆船メイ・フラワー号の帰還を見送る清教徒」の絵が著作集第九巻の口絵に挿入されてある〕

＊

「樅の日記」（4）

１９１８年12月11日、12日

小池政美

〔筆者24才の暮にあたる。編集、辰雄。
圏点、〔　〕はすべて編者の附加せんもの〕

○1918年12月11日（水）

霰、雪、霙。

朝が段々寒くなると不信仰に帰る、何とかせねばならない。今のままでは普通の人と何等の異（ちが）いもない。しっかりせねばならない。詩篇第1篇は何を教うる。僕は所謂世の志操堅固者を何と考える、本当にしっかりしなければならない。今週も半はすぎた、もうあと二日を余すのみではあるけれども、その二日を美しく暮らしたい。

朝附属へ行く。〔○○〕さんと今度の高等学校令とについてである。〔○○〕先生は〔○○〕さんを大変賞（ほ）めて居られた。高等学校問題については何も彼も大体僕の考えと同一であった。固（もと）より本当の高等学校の生活の尊き所以から説き起こして年齢との関係に及ぶ事などは先生のお考えの中にはなかったし、また今年一高に入れる事は難しいが来年は大丈夫というようなさし当たりの細かい区別観は僕にはなかった。要するに単に高等学校（一高とは云わない）に入るという事だけからいうならば、今年でも好いけれども、高等学校へ入ってからの学問健康の事、特に高等学校の高等学校たる所以を解せんためには、ここ一年は静

かに延ばすと云うは必要であり、よき事であるという事になる。

お昼に龍ちゃんから葉書が来る。こんどの日曜は午前の中は家にいるから早く帰っていらっしゃい、嬉しい話もあると書く。よき青年を弟として嬉しい事である。恩賜の時計は僕に於てはそう尊いものではない。……僕にはもっともっと望む高きものがある。昔グリークでさえ詩人にはオリンピアの賞はなかった。僕等何を真理のために、真理の外の賞を望もう。ただ龍ちゃんの真面目が軽薄才子の小細工を破りつつ行くを嬉しと思い、励ましたいと思う。

雪を踏んで本郷へ行く。黄孫樹は外の木には見られぬ温味のある梢に白を載せて美しい。政治学の教室は何時になく落ち着いて、よき二時間の講義を伺う事が出来た。題は「国家存在の理由」である。説明はいささかあき足らぬ所なしとしない。ただ Origin of Species〔種の起源〕を読む可き時の与えられん事を願うのみ。

図書館で高等学校令を調べ、疑とすべき点二、三を認め、文部省の真意とする所を解し得ず、浅墓町へ向かう。要之、僕は高等学校という所は凡ての古き習慣、因習、権威をそのままには解することをなさず、新たに自身に自身と考え行く尊き時代であり、必要な時代であり、大学生のよき者が高商等の学生と比し得ざる所以の原因であり、そのためには中学四年で行く事の不利なる所以を説明した。……

真面目に神よりの力を神のために使いたいというなら二部の方が好くないかと思われる二部の中、工部と農科と何れを選ぶ可きか。僕自身なら農科を選びたくある。……

帰るにのぞんで、来週の土曜に感謝祭をしたいと思います、どうぞこの頃を有難いと思わるる方はお知らせ致しますからおいでくださいという。……毎日毎日を有難いと思って感謝して居るなら或いは好んで事を起こす事になるかも知れない。しかしこの感謝祭を特に好んで事をなすと思うことは、毎日を有難く思って居る人の考えとは受け取り難い。何となくくぎりと思われる一年の端に立って、過去を思い未来を希むは是、事を好んで起こす者の徒事であろうか。僕にはそうは思われない。僕には最も純粋によき事と思われる。殊に有難く思う可き事を日常の多忙か或いは不注意か或いは温かならぬ心を有するがために忘れやしないかという恐れがある人等とその故に一晩の情談をしたいというのが僕の願いである。この願いをも、推して事を好むというならば、その人の心果たして感謝の念あってなおこれを言うや否やを疑わざるを得ない。……感謝の心なき人は来らざるにしかずである。ただ来年の暮もその楽しみをなす機会の与えられん事を希うのであるが、その時までには本当に毎日毎日を感謝す可き心のその人に与えられん事を希うのみである。

雪を踏んで帰る。〔〇〕ちゃんが見えた。彼も未だ未だ考えることを要する。求めんことを要する。

夜石坂先生の債権総論終る。明日は債権各論に入る可く。夜一時半就床。

○1918年12月12日（木）

一日曇った日であった。雪解けの道は悪い。快い靴の無い身には有難くない。但し夜に入っては月と星とは初冬の空に美わしく輝いている。

昨夜遅かったので今朝起きたのは九時であった。十時の時間にさえおくれた。Pünktlichkeit（ピュンクトリッヒカイト）〔規律正しき事〕という事は、友人と何処かで特別に私的に会おうという事や、または汽車の時間に限られた事では無いぞという事を思わせられた。小野塚先生〔昨今の帝大総長〕の時間に昨日おくれた身がまた今日も遅れた。

今日で「国家存在の理由」が終った。僕今までに国家存在の理由に関して三つの学説を聞いた。一つは上杉先生の道徳説である。一つは算先生の創設説である。一つは牧野先生の社会第一事実説である。而してここに第四説として小野塚先生の分析的説明である。小野塚先生は社会第一事実説に更に一歩を加えたものを説かれる。先生御自身も是は充分の説明ではないけれども出来るだけは試みた結果である、その思潮の大体は Utilitarianism, Qualified Intellectualism〔功利説、限定主知主義〕であるといわれる。僕は未だ未だあきたらぬと思う。以上四説はそれぞれ憲法、行政法、刑法、政治学というものをむしろ前提として見た国家存在の理由である。少なくとも憲法、行政法、刑法、政治学の国家観である。凡ての根本、人間の人間としての国家観ではないように思われる。僕も近き将来に自らの国家観を立てたく思う。〔神、この願いを聴き給わずして兄を取り去り給う。彼今天にて何を神より学びつつあるや?〕

麻布の帰りにおそらく〔○〕ちゃんと思われる方の後姿を飯田橋で見た。……〔○〕ちゃんの上に御恵深くくだれかし。〔○○〕の家は世間並の精神的ならぬ家の如く想像される。世間並の物質的家族の中でも複雑な家と聞く。かの家にこの吾等の知れる少女を送るは何となく惨(いたま)しいような気がしないではないけれども、今となってはただ彼の家の是に依って清められ健やかに堅められん事を希うのみである。八尺さん〔現在の高木八尺氏、帝大法学部教授。博士論文「米国政治史序説」の名著あり。最近、法学博士となる。本年45才。さはれ、私は博士号に意味なきことを付言する〕、十拳君、盾ちゃん〔神田乃夫氏令息〕の心配とならぬ事をのみ祈る。……

同じ時にまた武田のおば様と御一緒になった。おば様一日のお仕事をおすましになって愉快相に帰っていらっしゃった。ぬかる街と寒い風、飯田橋から大曲までお伴をする。

辰さんは此の頃大変に数学に熱心になって来た。嬉しい事である。冬は英語を一緒にやりたいと思う。

〔冬にはクリスマスの頃から、"Little Lord Fauntleroy"「小公子」を兄は教えて下さった。その本の初めの頁に次のように記してある。

To Tatsuo-san
With hearty joy and hope.

On my first Christmas, 1918.
Your brother
Masami

辰雄さんへ
心からの歓喜と希望を以て
私の初めてのクリスマス、１９１８
君の兄
政美

“With hearty joy and hope”今、兄が天でこう叫んでいてくれるように思えてならない。順子さん、この兄のこの喜びの言を特に憶えて下さい。１９１８年と云えば御身が7才、僕が14才の時でした。」

僕より美質なる青年はまた僕より有能ならざる筈はなく思われる。

〔兄のこの言は私に不当である。兄はどんなことがあっても私よりは優れている〕。

夜、内村先生が感謝を以てお送り下さった「聖書之研究」12月号が届く。僕も感謝して封を解く。詩篇第1篇、第19篇の解釈がある。クリスマスには「子供の聖書」と「基督教問答」とを〔おば様〕にさしあげようと思う。その時これを貸してさしあげるのは〔注釈の役をつとめるから〕最有効に思われる。母様には僕の試験が終ってからである。今日は時間通りに寝る。

よき一夜を与え給え、凡ての人に幸ある一夜を与え給え、アーメン。

「雁が音」〔短詩〕（２）

（其４）「井ノ頭の夕」　（１９２９・３・１）
（其５）「大学よ」　（１９２９・３・３）
（其６）「凱旋」　（１９３０・３・３）

残樅

（其４）

「井ノ頭の夕」

１９２９年３月１日夕、家に帰りて直ちに

＊

私は或る問題に遭って悲しんでいた。私の胸奥を知る者とては一人もなかった。憂愁を胸に秘めて井ノ頭池畔に赴いた。静寂なる自然が私を迎えてくれた。空を掠めて飛ぶ一羽の鳥、偶々（たまたま）伐らるる一株の杉、梢上に現われ出でし星の影、すべてがそのまま我が心の具現であった。斯くも主客合一、彼我一如の境地に帰りし夕を奇しくも思い、悲愁の中にも何か満たさるるものあるを感じた。鳥よりも美わしき者を神は備え給うたのである。杉よりも貴き者を神は聖国に育み給う。星よりも大なる者が我らの光であり、目的である。栄光羔の君にあれ！

＊

１９３３年２月11日、建国祭の日

泉水（いずみ）が湧き出ている、
　樹々が生い茂っている。
夕陽が樹（こ）の間から指す、
　水がきらきら光る。
人影少なきところ、
　家居稀なるところ。
池の水面（みなも）が静かに揺らめく。
　水蓮の帆舟よ。
森の影が宿っている。
　おごそかな沈黙（もだし）よ。
蒼空が覗いている
　深き微笑（えみ）に。

若き人が佇む
　杉の樹蔭に。
彼は仰いではうつむく。
　眴めてはまた仰ぐ、
一羽の鳥が池の面に
　影を投じて過ぎ去った。

夕陽が沈んだ
　雲が憩うた。
すべてが昏冥に解けてゆく
　ものみなは睡りに落ちてゆく。
彼若し旅人ならば
　森に抱かれて一夜を。

池の端を影一つ動く、
池が若し吸い込むならば
彼は水の精に！
橋の半、池の心臓に
孤影は静かに止どまった。
(1)大地の眸と人の眼に！

(1)詩句を説明するは興さむるわざであるけれども、この句は即ち、池に水あり、眼には涙あり、との意である。

斧の音が聞こえて来る、
　一本の杉が倒された！
あまたの樹々が山彦かえす、
　寂しげに痛ましく。
雲が破れる、
　一つの星が点じた。

彼の足は家路に、
　心は夢む彼の国を。
夕闇は森に囁き、
森はみ空の明星に告げる、

人の子の永遠の伴侶よ！
真実と純潔に！

＊

（其5）

「大学よ！」

塵の都に聳え立つ
真理の城よ大学よ、
春風立ちて期満ちて
離別の朝は迫り来ぬ。
想えば速き三年かな、
胸のあつかる昨日今日！
学問の府の生命なり
書籍の森を蔵めたる
大図書館の眼鏡に
夕陽の光うくるとき
学徒の詩想を祈れかし、
み空に星のきらめく夜
真理の黙示をねぎまつれ、
陽光東方に昇りなば
義の一日を祈念せよ。
口には言わねど感恩の
想いに添えてこの願望、
離別を惜しみて贈るなり。

＊

（其6）

「凱旋」

恩師の父君の御逝去（１９３０年３月１日）を知りて

１９３０年３月３日

戸外には　万斛の天涙ぞ降る、

１９２９年３月３日夕

闇の中　　ただ黙然と几に倚れり。
祈らんとせば　　何故か祈祷は還る。
無限の響　　虚空に震うならん、
無言の声　　わが頭上を圧して重し。
立ち帰りて　　空隙の大なるを察し、
静思して　　悲愁の深きを想う。
新町の空は　　春未だ醒めざるの夜
縮衣を拡げて　　涙の家をば蔽うなり。
さはれ思え、　　死せし者は勇士なるを。
想いまつる、　　断食数旬の籠城を、
察しまつる、　　昼夜をわかたぬ痛苦の襲撃を。
その昔　　旅順の戦に一大隊の長として、
弾雨の中を　　奮戦之努めし時に、
「我等は此処に　　戦死せん、一歩も退くべからず」と
叫びし人は　　今世の最後の敵を病魔とし、
忍従の床に　　真乎の武人の意気をぞ示す。
如月の　　明けにし朔日の空光あれど
援軍空しく　　竟に城は落ちにける。
さはれ如何に　　天軍既に武人を奪りて
白雲の如　　天翔けりて凱歌をうたう。
君見ずや　　勇士の眉雪輝くを！
君聞かずや　　聖名を称うる武夫の賦を！

＊

編輯後記

多忙であったとはいえ、書くことの少なかりしをうらむ。しかし、量を私は問題としない。むしろわが勉強の不足をかなしむ。しかし、私は焦慮すまじ、力の永からんことをのぞむ。神よ、わが弱きをあわれみ給え。

１９３３年２月26日

「常にイエスの死を我らの身に負う」（コリント後書第４章10節）